

狭い六畳一間のわが家では話が出来なかった。家の近くの公園で待合せをした。時間前に姿を見せた妹は悄然としていた。下宿先から駆け付けた私は久し振りの対面だった。

ベンチに腰をかけるなり妹は「兄ちゃん、これどうしたらいいの？」と、鞆から封筒を取り出した。便箋には『本当に困った時に使いなさい。役立てば先生も嬉しいです』とそれだけが簡潔に書かれてあり、担任の先生の記名があった。三千円のお金が同封されていた。思わぬ大金に驚愕した。現在の五万円以上の価値がある大変なお金だ。

妹は「先生から大切に使いなさいと職員室で渡された」と言い「この事は、絶対に両親に言っただけでいいかないと約束されたの」と付け加えた。手紙とお金の処置に困り果て、連絡をしてきたのだった。

これだけの大金に、思い当たる事が瞬時にあった。聞くのが怖かった。それでも聞いてみた。「給食費、学級費、PTA会費。修学旅行の積立金はどうしているの？」と。普段から内気な妹はしばらくの間は無言でいた。しかし、妹の精いっぱい耐えきれぬ時間は長くはなかった。「兄ちゃん！」と叫んで両手で顔を覆い、突然にしゃくりあげ始めた。ひたすらに声を押し殺し、激しく震える肩が、全てを教えてくれた。

今まで無理やり詰め込んでいた感情が、一気に弾け散った。話す言葉が湧き出る思いと涙で幾度も途切れた。誰にも言い出せず、いつもお金の心配をしていた妹の寂しき胸中に、慰めの言葉はなかった。黙って妹の背を撫で続けた。たまらぬ悔しさと悲しさが、同時に膨らんできた。妹の張り裂けるような悲しき感情は、三年前の自分の事でもあった。

集金日が怖かったと妹は言った。先生から集金袋を渡され、母に差し出すのが出来なかったと吐露した。家計の底も抜け切った苦しい生活を、三歳下の妹は当然に知っていた。集金袋を差し出す時の、母の一瞬曇りかける顔には胸が詰まり、耐えられなかった。母に言い出せずに終わった。集金袋は学校と家とを何度も往復した。その体験は私にも決して消えないものだった。中学一年の妹の、やっと吐き出す言葉は辛すぎた。私は新聞配達料を母に渡し、学費の支払いを頼んだ。だが妹には無理な仕事だった。朝夕刊の新聞配達を始めた理由も学費の「滞納」からだだった。兄弟で同じに切な過ぎる体験をしていた。

先生は私の中学三年の時の担任だった。偶然に妹の担任にもなった。わが家の生活は十分に把握していた。私は夜学部高校の一年になっていた。余分なお金など一銭もなかった。妹を懸命にさとして、先生の厚意をありがたく受ける事にした。母にも話すことはやめた。貧乏をさらけ出す事の羞恥心。先生の前で、母には頭下げさせたくなかった。それも先生の情愛だと感じた。二人で詮方ないこの困窮生活を、恨んで泣いた。悔しかった！

最後に妹が一番心配していた修学旅行は、「兄ちゃんがきつと行かせてあげるから、心配

しないで」と約束をした。重い約束だった。中学校で一番お金のかかる行事だった。親に面倒をかけられず、苦勞の果てに自力で参加したあの時を忘れられなかった。必ず参加させたかった。安心して頷いた妹の顔には、幾筋もの涙の跡が張り付いていた。本音を話せるのは兄弟しかなかった。黄昏の終えた公園には、照明だけがやさしく輝いていた。

先生には心からの御礼の長い手紙を書いた。「必ずお返し致します。それまではお貸し下さい」とした。音楽の担当だった先生の、情感の豊かに溢れていた姿を思い浮かべた。ただ恩情に預かるしか、解決策はなかった。

私は高校四年になった。片時も先生の深い恩は忘れる事がなかった。やっと用立てた三千円を同封し、返済の遅くなったお詫びとともに御礼の気持ちを書いて送金した。すぐに返信があった。三千円も返された。手紙の主は先生の奥様からだった。『主人は昨年末、突然の交通事故でなくなりました。お金はお返しします。主人の意思としてお受け取りください』の文面に、愕然とした。先生はこの世にはいなかった。間に合う事がなかった。本気で泣いた。受けた恩義の重さに、返せずに終わった誓いの軽さ。今でも引きずる大き過ぎる痛みと後悔は、生涯消える事がない。

妹が六三歳で、母と同じ癌で亡くなった。母と似て恵まれた人生ではなかった。形見分けで鏡台を片付けていた時、引き出しの中から、あの時の先生の手紙と当時の一枚の古い千円札が、記念品のように大切に保存されて出てきた。人生の守り神のように持ち続けていた妹の律儀さを知った。妹らしい人生に感極まった。『困った時に使いなさい』の先生のインク文字は、干からび変色していた。

手に取り妹の面影を追っていると、あの公園の灯りの中から「兄ちゃん！」と呼ぶ妹の声が、確かに聞こえて来た。止まらぬ涙の中に妹の顔が浮かんだ。